学習内容報告書 フォーマット

学校名	広島市立中野東小学校
授業者	長妻　貴志　　春木　美希

1.　単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1.　単元名

海と川のつながり（海と川の様子や生き物を比べてみよう）

1-2.　学年

第５学年

1-3.　教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間 35　理科 12　社会科 10）

1-4.　単元の概要

学区を流れる瀬野川を活用して，全学年が川での体験学習・探求的な学習を行っている。川の学習を通して，川に親しみ愛着をもつ児童が増えているが，昨年の豪雨災害により川に対するイメージが変わってきている。そこで防災に関する学習も踏まえながら，目の前の川が瀬戸内海につながっており，実感できておらず，海の恩恵や海に関する環境保全の大切さは児童の身近な問題ではない。

瀬戸内海で実施する野外活動で海の生物について話を聞いたり，見たりすることで，環境によって生息する生き物に違いがあることに気がついたり，ウミホタルを観察して，海の神秘性を感じることで，自分たちの身近にある瀬野川を大切にしていくための取り組みについて考えさせる。また、SDGｓとしてこれから解決しなくてはいけない問題を考え、自分たちが考えた問題を国際連合が定めた１７の目標別に分けながら、ワークショップを通じて問題を解決するための必要な力について考える機会をもったり、ポスターセッションを行い自らの意見を発信したりする。

1-5.　単元設定の理由・ねらい

総合的な学習の時間 35

1-6.　育みたい資質や能力，態度

海の不思議な生物の形態的，機能的な特徴について，調べたり，観察したりし，生息する環境と関連付けて考えを深めることができるようにする。自分たちの生活は，森林や川などから海とつながっていることを理解し，よりよい地域環境を考え，持続可能な社会の実現を目指す働きかけができるようにする。海のいろいろな場所にすむ生き物の違いを調べ、生き物と周辺の環境の関係について理解することができるようにする。

1-7.　単元の展開（全３５時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
第１次	瀬野川について学ぶ １　西大井手の調査（５～７月） ２　米作り体験 （５月～１０月） ３　西大井出についての新聞作り（７月） ４　現在の瀬野川調査 	・現地調査を通じて西大井手について深め，農業用水として地域と川のつながりついて深めていく予定だったが，昨年の西日本豪雨のため，西大井手の取水口が壊れてしまったため，西大井手の調査は部分的なものにしぼって実施する。（現地調査） ・実際に米作りを行い、米作り文化を体験する。 ・地域の人が，昔の川の様子や生活とのつながりなどを着眼し、西大井出についての新聞を作り発表する。（新聞・発表） ・地域の文化を支えてきた瀬野川の様子を調べ、専門家（環境カウンセラー）を招聘して，絶滅危惧種など，近年の環境の変化によって魚の数や種類が変化してきたことを学習する。（現地調査）
第２次	瀬戸内海を学ぶ １　海辺の生物観察講義(9 月臨海宿泊活動) ２カッター訓練等の体験（9 月臨海宿泊活動） ３　野外活動新聞作り（１０月） ４　SDGｓとしてこれから解決しなくてはいけない問題を考える。 	・海については，これまで遠い存在であるので，体験的な活動を増やし、海のいろいろな場所にすむ生き物の違いを調べ、生き物と周辺の環境の関係について理解することができるようにする。現地の海辺で専門家（さとうみ科学館）による干潟観察会、ウミホタル観察会を開く。（講話・観察） ・カッター訓練等の体験を通じて、海の偉大さにふれ、畏敬の念を深める。（体験活動） ・しっかりと海に向き合う体験を通じて、生息する環境と関連付けて考えを深めることができるようにする。また、海も自分たちの生活に身近なものであると理解を深める。（新聞・発表） ・自分たちが考えた問題を国際連合が定めた１７の目標別に分けながら、ワークショップを通じて問題を解決するための必要な力について考える。海のいろいろな場所にすむ生き物の違いを調べ、生き物と周辺の環境の関係について理解することができるようにする。（ワークショップ）

第３次	川と海とともに生きる １　豪雨災害おける被害と復興（１１月） 	・災害当日やその後の復興の様子を振り返るとともに、外部講師（日本赤十字社）を招聘して災害救護活動を通じて生命尊重について学ぶ機会を設ける。（講話・ふりかえり）
	２　川と海とともに生きていくために、これまでの活動を振り返り、ポスターにまとめていく。 	・自ら課題を発見し，その課題を追求し問題解決したことを自分なりに工夫してまとめることができる。自分たちの生活を自然などのかかわりを通して見つめ，より良い生き方を考えることができる。（ポスター）
	３　ポスターセッションを行い、情報を発信したり、意見交換を行ったりする。 	・川と海では，生息する生き物の種類には違いがあることに気が付き，それぞれの環境に適応した暮らし方や合理的な体のつくりをもっていることなどを意見交流する。 ・瀬野川が瀬戸内海につながっており，川と同じように海の恩恵や海に関する環境保全の大切さを発信する。（ポスターセッション）

2.　学習活動の実際

2-1.　単元における位置づけ

単元　３５　時間中の　７～９　時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目　/ 単元 15 時間中の 4,5 時間目

2-2.　本時の目標

地域の用水路である西大井手について興味をもち，西大井手の学習をもとに追求したい課題や疑問をもつことができる。

2-3.　本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
【事前学習】 ○　西大井手について調査したことを振り返る。	・　西大井手について振り返り，本時の学習につなげる。
【本時】 ○　西大井手について調　べたいテーマを作る。 ○　西大井手を調査して話し合う。 ○　全体で交流する。ポスターセッション ポスターセッション	・　海のつながりも意識しためあてにとりこむ。 ・　西大井出について調査して分かったところを班でまとめさせる。また，まとめる際，「歴史」「理由・目的」「仕組み」の観点を与える。 ・　全体でまとめやすいように，班で話し合った内容を１枚に１つ付箋に書かせる。
【事後学習】 ○　調べたい課題を設定し、新聞にまとめる。 ○　新聞を掲示して交流する。	・　なぜ課題として選んだのかを理由も書かせる。 ・　「分からない」ことから課題を設定するように声かけをする。 ・　調査してことだけでなく、気付いたことや思ったことを新聞に書かせる。

2-4.　単元における位置づけ

単元　３５　時間中の　１７～２３　時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目　/ 単元 15 時間中の 4,5 時間目

2-5.　本時の目標

海の生き物を実際に干潟などで調べたり，観察したりし，生息する環境と関連付けて考えを深めることができるようにする。

2-6.　本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
【事前学習】 〇海の生き物について調べる。 ・川に住む指標生物の分類のように，資料や図鑑で仲間集めをしながら干潟や磯部に住む生き物について事前に調べておく。	・保光義文環境カウンセラーによる川辺の生物観察の指導や水質調査の分類を想起させる。 ・海の生き物図鑑等を使用して調べておく。
【本時】 〇海辺の観察する際の留意点，使用する道具の使い方 ・危険生物の対応について ・道具の使い方について （たこメガネ，タモ網，ヘラなど） 	・外部講師による観察会:大柿自然環境体験学習交流館（さとうみ科学館）の専門家による指導・支援 ・専門家による生息場所や生態の説明，着眼点を具体的に示しながら，一緒に活動する。
〇干潟や磯部で，生き物さがしをする。 ・探した生き物を観察する。 （カメラやタブレットで撮影して記録に残す） 〇海の生き物の分類を行う。 ・川に住む指標生物の分類のように，海に住む生き物を生息する環境などで分類する。	・専門家による生息場所や生態の説明：海の生物は，川の生物と同様に生息する環境に適応した形態的，機能的な特徴をもっていることについて補足してもらう。
【事後学習】 〇新聞作りを通して学習のまとめを行う。 ・学習したことについて分かりやすく記事に書く。	・ビデオや写真などで活動を想起させる。

2-7.　単元における位置づけ

単元　３５　時間中の　３２～３４　時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目　/ 単元 15 時間中の 4,5 時間目

2-8.　本時の目標

海の生き物を実際に干潟などで調べたり，観察したりし，生息する環境と関連付けて考えを深めることができるようにする。

2-9.　本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
【事前学習】 〇川と海とともに生きていくために、これまでの活動を振り返り、ポスターにまとめていく。 ・自分たちの生活や課題になっている環境問題について考える。(海洋汚染など) ・川の水が海に及ぼす影響（海と川のつながり） ・海は川とつながり、大きな影響を及ぼし合っていることを理解 ・自分たちの暮らしも海と密接に関係していることを知り、環境保全の意識を高める。	・タブレットやビデオなどで川、海それぞれの現地調査の活動を想起させる ・生き物図鑑やインターネット等も適時活用しながら調べておく。
【本時】 〇海の生き物と川の生き物との比較しながら、ポスターセッションを行う。 ・共通しているところと異なるところの発見 ・海の生き物の特徴、生態（専門家からの講義より） ・海には川と同様に多様な生き物が存在し、それぞれの環境に適応した暮らし方や合理的な体のつくりをしていることを理解 	・保護者等にも参観してもらい、情報発信を行う。 ・質疑応答を繰り返し、様々な意見を交流していく。 ・海と川との類似点や相違点を分かりやすく説明する。
【事後学習】 〇学習のまとめを行う。 ・学習したことについて分かりやすく記事に書く。	・川の水は，やがて海にたどり着くことなど海は川とつながっていることを多面的・多角的に理解し，身近な環境が海とつながっていることを確認し，よりよい地域環境を考えていく。

3.　今回の活動の自己評価

【子どもたちの反応・感想より】

実践の成果としては，子どもたちが意欲的に川や海に向き合うようになった。これまでは，遊び場としか見ていなかった川の，恐ろしさだけでなく，恵みにも目を向けて考えることができるようになり，地域の大切な自然として関わっていこうとする意欲がみられた。

海については，これまで遠い存在であり，夏休みに遊びに行くくらいの感覚でしかなかったが，身近な川とのつながりに気がつき，川だけでなく，海も自分たちの生活に身近なものであると感じていた。

川と海では，生息する生き物の種類には違いがあることに気が付き，それぞれの環境に適応した暮らし方や合理的な体のつくりをもっていることを実感していた。

4.　今後の課題

昨年度はさとうみ科学館の方が持ってきてくださった数種類の生き物に触れる体験活動であったが，本年度の野外活動における海辺の生物教室は，自分たちが実際に干潟や磯部で生き物を探し，すみかや環境を考えながら観察することができ，より実感を伴った海の理解が進んだ。さとうみ科学館の方の指導・支援のもと，よりよい成果が得られていたと思う。次年度の課題としては，専門家の支えがあってこその活動であり，子どもたちのより探求的な活動につなげる体験活動が求められる。そのためには，自分たちが課題を発見する過程を大切にし主体的な展開に導けるようしていく必要がある。

5.　本学習内容報告書活用にあたっての留意点

○川の水は，やがて海にたどり着くことなど海は川とつながっていることを多面的・多角的に理解し，身近な環境が海とつながっていることを理解し，よりよい地域環境を考え，持続可能な社会の実現を目指す働きかけができるようにする。

○問題解決や探究活動の過程において，図鑑や専門書，インターネットなどを活用したり，直接，地域の方や専門家の方に聞いたりして課題を探究できるようにする。

○実際に地域の海や川に足を運び，観察や現地調査などの体験的な学習や専門家や地域との連携を図る学習を取り入れる。

○探究したことを基に，それぞれの考えを伝え合う場を設定し，発表会を開いたり，新聞などを発行したりして，情報を発信していく。持続可能な社会の実現，地球環境の向上を目指す働きかけをしたり，実際に，行動に移したりする。

※実施した単元ごとに作成してください。

※写真，画像，図表等の使用可。必要に応じて記入欄やページ数を増やしても構いません。

※基本レイアウト

フォント：MS 明朝，10.5 ポイント / マージン：上下端 20㎜，左右端 16㎜

※ファイル名は「学習内容報告書_学校名」とし，複数提出する場合は学校名の後に数字を記載してください。

例：学習内容報告書_海洋市立パイオニア小学校 1

※年間指導計画（年間の指導計画における単元の位置づけが分かる資料）があれば別添資料として提出してください。フォーマットの指定はありません。